

関東地方出土の和同開珎

深澤 靖幸

I はじめに

今回の集成では、関東における和同開珎の出土地（伝世等を含む）は59地点で、総数74枚を数えた。このうち古代遺跡出土は51地点65枚である。このほか大量出土銭など中世遺跡出土5地点6枚、採集などの詳細不明が4地点4枚ある。総数74枚のうち、銀銭は2地点2枚で、ともに下総で発掘・発見されている。

以下では、大量出土銭など明らかに中世の遺構や遺跡に伴う事例を除き、出土分布や出土遺構を概観する。その上で、出土遺構として最多の堅穴建物出土例について若干の分析を試み、関東という地域の特質を見出してみたいと思う。

II 出土分布と遺跡・出土地の性格

II-1 旧国別分布

まず、旧国別に出土数を見る（図1）。対象とする関東地方の1都6県は、旧国では上野・下野・相模・武蔵・安房・上総・下総・常陸の8か国に相当する。今のところ安房国（718年上総国から分置、741年再統合）での出土は知られていない。

和同開珎が出土している7か国のうち、出土地点、枚数ともに多いのは武蔵（20地点26枚）である。下総（12地点12枚）や上野（8地点15枚）がこれに次ぐ。これに対して下野（2地点2枚）・上総（2地点3枚）・常陸（4地点4枚）、相模（5地点5枚）の3国での出土数は僅少で、その差は大きい。

こうした分布状況からすると、国によって和同開珎の普及に格差が存在した可能性を指摘できる。この点を検証することは難しいが、ここでは和同開珎を含む古代官銭全体と、銅製腰帯具の国別出土数を比較し（図2）、和同開珎の位置付けを明らかにしてみよう。まず古代官銭全体の場合、和同開珎の出土数が少なかった下野と相模からの出土数が武蔵に次いで多くを占め、異なった傾向を示しているように見える。しかし、下野出土の75枚のうち72枚は男体山山頂遺跡からの出土であるから、むしろ下野における古代官銭の普及は極めて僅少であったと評価できる。したがって、相模での出土数が増加していることを除けば、和同開珎の出土傾向に似た状況にある。次に、銅製腰帯具の出土数は、下総・武蔵・上野で多く、下野・上総・常陸が少ない状況で、やはり和同開珎の傾向に近似している。要するに、国による出土数の差は和同開珎に限ったことではなく、律令的な文物に共通する傾向であったと判断できる。

もっとも、こうした分布状況は、発掘調査件数や調査面積の多寡が影響している可能性を否定できない。この点を無視した分布論は意味がないが、和同開珎をはじめとする律令的な文物の使

用形態に差異があったと推測することは許されるかもしれない。

II-2 国府への集中

上述のような旧国別の分布状況とは別に、関東での和同開珎出土地をながめると、国府周辺への集中傾向を読み取ることができる。出土数の多い上野、特に武蔵ではこの傾向が著しい。

武蔵国府関連遺跡で5地点6枚、北隣の武蔵国分寺遺跡では2地点2枚の和同開珎が出土しており、国府・国分寺を擁する府中・国分寺市域で武蔵出土の半数を占めるばかりか、近隣の遺跡での出土も多い。すでに指摘されているように、古代官銭全体でも国府とその近傍への集中傾向が認められている（坂口 1992、府中市郷土の森博物館編 1999、深澤 2000）。

この傾向も発掘調査の偏在性を無視できないが、関東で1遺構から複数枚数出土した事例を見ると、白山古墳の8枚、多摩蘭坂遺跡での5枚、武蔵国府関連遺跡 471 次での2枚のように、上野・武蔵両国の国府・国分寺及びその周辺に認められる。関東における官銭の普及は、国府を基点にしていたと考えたい。

II-3 遺跡・出土地の性格

「集落」「官衙」「寺院」「古墳」「古墓」から出土している。それぞれの出土数は図3の通りであり、集落からの出土が32枚で半数近くを占める。今回の集成では、官衙や寺院周辺に展開する集落を「官衙」「寺院」に分類したので、見方によっては「集落」の比率はもっと高くなる。

このように官衙・寺院関連集落を除外したにもかかわらず「集落」の内実は多様で、武蔵・多摩ニュータウンNo.71 遺跡のように丘陵に営まれた単独の竪穴建物からも出土している。とはいえ、郡や郷の拠点的な大集落からの出土が多くを占めることは間違いない。特に注意すべきは、上野・熊野堂遺跡や武蔵・若葉台遺跡、下総・鷲谷津遺跡、同・観音塚遺跡などのように官衙や官道と至近の位置にある遺跡が目立つ点である。また房総では、下総・塚越遺跡や同・江原台遺跡のように、四面庇付きの掘立柱建物などの存在から寺や堂（いわゆる村落内寺院）を含んでいると評価されている遺跡も多く見出せる。こうした寺や堂の成立年代と和同開珎出土遺構の年代は必ずしも重なる訳ではないが、これら寺や堂を成立させるような拠点的な集落に和同開珎がもたらされたことは認めてよい。

一方「官衙」「寺院」出土はそれぞれ9枚、6枚である。前述の通り周辺集落を含んだ枚数で、官衙や寺院の本体に伴うものは、官衙では下総国相馬郡の正倉に比定される日秀西遺跡、寺院では常陸・茨城廃寺を挙げうるにすぎないから、意外に少ない。

「古墳」出土は5地点13枚を数える。このうち下野・飯塚44号墳例は石室前庭部からの出土ではあるものの混入と見做されており、上野・弁天山古墳も状況不明ながら埴輪を伴う古墳であるので、混入の可能性が高い。発掘調査によって古墳に伴うことが確実視できるのは上野・引間2号墳例のみだが、関東最多の8枚が重なって出土したという同・白山古墳例は蕨手刀、方頭大刀、佐波理銃といった伴出遺物から古墳に伴うものと判断してよいだろう。武蔵・大野原古墳例

は確実性にかけるものの、やはり蕨手刀を伴うという。今のところ、古墳出土例は上野とその周辺地域に限定されており、これはそのまま蕨手刀や銅製腰帯具を出土する古墳の分布に重なる。

「古墓」は武蔵・菅生潮見台 2334 例のみで、火葬骨蔵器内からの出土である。火葬墓は南武蔵の川崎市と横浜市北部を中心とした地域に集中することが知られているが、本例もそれに含まれる。僅か 1 例ではあるが、地域的な特性を反映したものと見做せよう。

なお、日光男体山山頂遺跡から 59 枚の延喜通宝をはじめとする計 72 枚の古代官銭が出土しているが、今のところ和同開珎が明確な祭祀遺跡から出土した事例はない。

Ⅲ 出土遺構

Ⅲ-1 出土遺構の種別

次に出土遺構とその年代を整理する。出土遺構の種別は遺跡・出土地の性格と重複する部分も少なくないが、具体的な出土状態にも触れてみよう（図 4）。

① 竪穴建物

竪穴建物からは 31 遺構で出土しており、全体の過半数以上を占める。関東全域で普遍的に見られる。竪穴建物出土例に関しては後に分析することとし、ここでは触れない。

② 掘立柱建物・礎石建物

竪穴建物出土例が多数を占める一方で、掘立柱建物の柱穴や礎石建物に伴う事例は各 1 例と少ない。同じ建物遺構でありながら、竪穴建物との差は歴然としている。

その一つ、下総・日秀西遺跡は前述の通り相馬郡の正倉跡である。ここでは和同開珎銀銭が礎石建物跡の版築土中より出土している。こうした出土状況から、地鎮めに伴うものと判断してよいだろう。しかもその銀銭は鑿のような工具で半分切断された痕跡が明瞭に残る。大和・川原寺塔跡出土の、金銅製円板が付着した無文銀銭に類似した状況として注目される。いまひとつの相模・向原遺跡例は、2×3 間の掘立柱建物の柱穴の確認面で出土している。本例も下半を失っているが、人為的に切断されたものとは考えにくい。

③ 土坑

土坑出土例は 3 例である。

武蔵国分寺僧寺跡の北西 1.3km にある多摩蘭坂遺跡では、発掘調査区内の樹木を抜根した際に、須恵器蓋、椀、和同開珎 5 点、万年通宝 2 点が別々に採集されている。遺構は明らかでないが、椀底部内面には銭形の鏝が付着しているため、銭貨を椀に収めて土坑に埋置されていたものと判断されている。また、椀の内部には砂の充填が確認されており、報告書では火葬墓の可能性を指摘している。しかし、火葬骨は未確認であるばかりか、骨蔵器としては小型であるため、ここでは性格を特定せずに土坑出土とした。

本資料は出土状況が明らかでないにもかかわらず、7 枚もの銭貨を伴い、銭貨の埋置状態を復元できる点で興味深い資料と言える。そればかりか、須恵器椀の底部外面に複数文字からなる墨書を有する点で特異である。

まず、椀の底部内面に残る銭形の鏝は、少なくとも 6 枚分が確認でき、概ね環状に巡っている。

そのうち5つは鮮明さに欠け表裏不明だが、残る一つは「和同開珎」の銭名を読むことができる。したがって少なくとも和同開珎1枚は伏せて置かれていたことが判明する。なお残念なことに、これら7枚の銭貨は事故で失われた。

墨書については、次のよう報告されている。底部外面には23～27字からなる墨書が井桁状に配されている。A号は底部のほぼ中央にあるもっとも鮮明な1行で左文字。「申□□□主□□…」と判読。2文字目は「廢」、4文字目の旁は「足」か「尺」の可能性を指摘。B号はA号に並行する4～5文字。左文字かどうかはわからない。C号はD号に並行するが文字数不明で、左文字か否かも判然としない。D号はA号と底部中央付近で交差する6～7文字。最後から2番目は「己」、最後は「日」ないし「白」の可能性もある。これらの文字群はA→B→C→Dの順序で井桁状に書かれたもので、墨書された紙が椀の底部に密着していたため反転して写ったものと判断する。

本資料（須恵器椀及び蓋）については数回にわたり観察する機会を得ているが、A号1文字目の「申」以外は判読しがたいというのが正直な感想である（図8）。A号2文字目は「進」の可能性もあるが速断できない。また、現状ではC号の文字列は確認できない。その代わり、A号の左上に3文字程度の墨痕を確認できる。釈読とともに問題となるのは、紙に書かれた文字が転写したとする報告の当否であろう。私見では、墨痕の状況や文字列の交差した状況からすると、椀に直接左文字で墨書している可能性も捨てきれないと考えている。そもそも土中で紙の文書の文字が転写する状況は考えにくいと思う。そうであるならば、左文字は椀の内面から透視することを意図したものかも知れない。本事例の性格については、遺跡内はもちろん至近に奈良～平安期の遺跡は全く存在しない状況からすると、武蔵国分寺と密接な関係を有した呪術的な性格を想定すべきだろう。

武蔵・下石原遺跡第2地点例は本報告未刊のため詳細は不明だが、土坑内に正位に据えられた土師器台付甕内から検出されている。台付甕の口には土師器杯が伏せられていた。性格としては胞衣容器の可能性が指摘されているが、やはり断定できないため、ここでは土坑出土とした。なお、本事例でも砂が甕内に充填されていたという。容器や銭貨の枚数に違いはあるが、砂の充填は多摩蘭坂遺跡例と共通する。

同じ土坑出土例でも、下総・国府台遺跡例は土坑の規模と形態に大きな特色がある。平面形は3.5×3mの隅丸方形、断面は逆円錐形で深さ3mである。報告書で特殊遺構と名付けているように、完形品を含む多量の土器類、瓦、刀子、獣骨などが出土しており、短期間に投棄されたものと判断されている。残念ながら本報告書が未刊行で詳細は不明だが、類似遺構は武蔵国豊島郡家である御殿前遺跡などでも検出されており、祭祀的性格が考えられている。また、その形態は氷室の可能性が指摘される遺構にも近似する。

以上土坑出土例は、目的や行為といった具体性に欠けるが、祭祀・呪術的な性格を考えやすい事例といえよう。

④横穴式石室

横穴式石室出土は、上野・引間2号墳例、同・白山古墳例がある。これに武蔵・大野原古墳例を

加えられる可能性がある。引間2号墳と白山古墳は終末期群集墳の1基で、大野原古墳も出土が確かならば同様に考えられる。引間2号墳では、玄室中央から出土している。白山古墳では発掘調査以前に出土していたが、地主の話では玄室中央奥壁寄りから8枚重なって出土したという。この状態は、韓国・武寧王陵での五銖銭、河内・田辺8号古墓（火葬墓）での和同開珎11枚の出土状態を想起させる。1か所から出土した枚数としては関東最多であり、蕨手刀、方頭大刀、佐波理鏡、飛燕型鉄鏃が伴出している。

先述の通りこれら横穴式石室に伴う事例は上野と北武蔵に限定され、蕨手刀や銅製腰帯具出土古墳の分布と一致する。和同開珎・蕨手刀・銅製腰帯具出土古墳は東北地方に集中するが、八木光則氏は東北の銭貨を蝦夷の朝貢に伴う下賜品とみなし、だからこそ威信財として副葬されたのだと指摘している（八木1992）。上野・北武蔵でもこれに似た銭貨に対する意識が存在したと考えてよいだろう。

⑤その他

このほか、上野・下芝五反田遺跡では自然流路の可能性が高い溝、相模・真田・北金目遺跡群4区では水場遺構、相模・池子遺跡群No.1-A東地点では埋没谷、常陸・茨木廃寺では寺城北辺の溝から出土している。真田・北金目遺跡群4区と相模・池子遺跡群No.1-A東地点は多量の遺物を伴い、水辺の祭祀との関わりが想定される。

III-2 遺構の年代

次に、出土遺構の年代を概観してみよう。

紀年銘を有する木簡などの出土や実年代の明確な遺跡・遺構に恵まれない東国では、銭貨は出土遺構や共伴遺物に実年代の上限を与えることのできる数少ない資料として評価されてきた。しかし、初鑄年直後や次銭発行までの時期の遺構から出土した事例が僅少であることも指摘されている（坂口1992、依田2004）。もっとも、和同開珎ほかの遺物類の出土状態が記録され、遺構との関係や遺物相互の関係を問題にできる報告例は必ずしも多くない。

今回集成した遺構の年代を見ると、9世紀代11例に比べ8世紀代は24例と多数を占めるものの、やはり初鑄年に近い時期（8世紀前半代）に比定できる土器群をともなった事例は、上野・引間遺跡例、武蔵・下石原第11地点例、同・内出遺跡例、下総・印内台遺跡群32地点例、同・夏見台遺跡群28地点例、同・玉造上の台遺跡例、常陸・弁才天遺跡例にすぎなかった。

しかしながら、和同開珎が新銭発行以後に機能を失うわけではなく、中世の大量出土銭に混入することをも踏まえれば、8世紀前半代の遺構に伴う事例が少ないのは当然の現象である。むしろ、少なくない数の和同開珎が8世紀代のうちに埋没していると評価すべきだろう。

こうした事例のうち、最も早くに関東にもたらされ埋没した和同開珎は、武蔵・内出遺跡例であろう。和同開珎は竪穴建物の中央部の床面より5cm浮いて出土しており、伴出した土器群はカエリのある須恵器蓋を含んでいる。8世紀第1四半期前半から後半にわずかに入る時期に位置付けられる土器群である（酒井1987など）。発行年とのタイムラグはきわめて短いといえよう。

これとは逆に、10世紀代の遺構に伴う事例が今のところ見られないことにも注意する必要がある

ある。10 世紀に入ると東国の古代集落は解体に向かうから、遺跡そのものが僅少であることも斟酌しなければならないが、現時点では、中世の大量出土銭の登場まで、和同開珎はいったん姿を消しているといわざるをえない。和同開珎をはじめとする古代官銭が中世までどのようにして生き残ったのか、今後検討すべき課題である。

IV 竪穴建物出土例の分析

IV-1 竪穴建物出土銭貨に関する既往の理解

竪穴建物は出土遺構の過半数以上を占める。これは、「集落」「官衙」「寺院」出土例の多くが竪穴建物から出土しているためである。関東においては和同開珎のみならず古代官銭のほとんどが竪穴建物から出土しており、それが大きな特色となっている。

竪穴建物出土銭貨の性格については、呪術的な性格を読み取ろうとする試みがいくつかある。そうした動きは、建物廃棄に伴う儀礼として検討する必要性の提起にはじまり（金子 1987）、柴原永遠男氏による上棟祭や屋固祭との関連の推測（柴原 1991）へと進んだ。その一方、出土状況に基づいた分析もなされている。大上周三氏は神奈川県内の竪穴建物における銭貨の出土状態に注意を向け、床下からの出土を地鎮祭、床面及び覆土下層出土例を建物の廃絶時の祭祀に伴うものと評価した（大上 1989）。

筆者も東国出土の古代官銭を集成し、大上氏の方法に学びながら竪穴建物出土事例を分析したことがある。そこでは新たに竈構築時や廃棄時の祭祀に供されたものの存在を指摘したほか、床面や覆土出土例では建物北東部に多いことを確認し、松村恵司氏による竪穴建物出土鉄鏃に対する研究（松村 1993）を敷衍して、これを陰陽五行説に基づく鬼門を意識した建築儀礼に伴うものと理解した（深澤 2000・2003）。

IV-2 垂直分布

今回は和同開珎のみを対象に、竪穴建物跡内での垂直分布と平面分布を見てみる。ただし、遺物の出土状況に関する記述や図示のない報告書が少なくなく、出土状態からその性格を分析する作業を困難にしていることを付言しておく。

まず、垂直分布を見ると、覆土上層 3 例、中層 1 例、下層・床面 17 例、床下 2 例である（図 6）。覆土下層ないし床面出土例が圧倒的に多く、これに床下出土例を含めれば、竪穴建物出土和同開珎の多くは建物と密接な関係を有した遺物と判断できる。

このうち、床下出土例は、相模・尾尻八幡山遺跡例と同・草山遺跡例である。尾尻八幡山遺跡は報告書未刊行のため詳細不明である。草山遺跡例は 9 世紀中頃の竪穴建物の西南部の掘り方から出土している。ともに祭祀的な性格を持つ共伴遺物があるわけではないが、流入は考えがたく、人為的な行為を想定してよい。

関東地方の竪穴建物の床下からは、銭貨のみならず腰帯具や銅鈴、ガラス玉の出土も知られている。また、神功開宝が竪穴建物の四隅から、しかもそれぞれの隅から銭文が正位に読み取れる状態で出土した、相模の真田・北金目遺跡群（2 区 SI022）の事例もある。床下出土例は、建物

構築（竪穴掘削）に伴う地鎮めに供したものと判断して大過ないだろう。

17例を数える覆土下層・床面出土例には、僅かではあるものの、特殊な出土状態や共伴遺物を有する事例を見出せる。下総・観音塚遺跡例では、和同開珎は北東の主柱穴上の覆土から出土しているが、同建物からはこの他にも畿内産土師器、蛇紋岩製勾玉など豊富な遺物が出土している。しかも勾玉は被熱しているという。観音塚遺跡の西隣にある鷲谷津遺跡でも、豊富な遺物を出土した竪穴建物の北西隅の床面に接する層から和同開珎が検出されている。遺物の出土状態から概ね3回に分けて埋め戻しが行われたものと推測でき、その都度意図的に遺物を投棄したものと考えられている。

こうした事例から、覆土下層・床面出土例には、建物廃絶に伴う儀礼に供されたものを含んでいると判断してよいだろう。

床下や覆土下層・床面出土例に対して、覆土中層や上層出土例は竪穴建物との関係が不明瞭な出土状態といえる。建物廃絶後の窪地に廃棄されたり、流入したものである可能性も否定できないが、両者あわせて4例にすぎないため、ひとまず措いておく。

IV-3 平面分布

覆土下層・床面出土例には建物廃絶儀礼に供されたものが含まれていることを指摘したが、全てをそのように判断してよいか、問題を残していることはいうまでもない。また、覆土上層や中層出土例の場合、建物廃絶後の窪地への廃棄や流入の可能性もあろう。

この点に関して、前稿では、竪穴建物を北西・北中央・北東・西中央・中央・東中央・南西・南中央・南東の9つに区分して集計した結果、建物北東への集中傾向を認め、鬼門を意識した上棟・屋固め儀礼の存在を推測した（深澤 2000・2003）。そこで今回は、上記9区分に加え、竈ないし竈周囲を別途集計してみた（図7）。その結果、予想に反して、北西部出土例が7例で、9区画のうちの半数近くを占めることが明らかになった。方位に意味を見出すには資料数が少ないため不安定なのかも知れない。あるいは、8世紀代を主とした和同開珎の段階では鬼門を意識した上棟・屋固め儀礼の存在は認められないのかも知れない。この点は古代官銭を対象に改めて検討しなければならない、今その用意はない。

しかしながら、観念的だが、和同開珎が竪穴建物に流入して埋没する環境は、理解しにくい。建物廃絶に伴う儀礼はもちろんのこと、栄原氏が紹介した、建物の造営途中や完成後に上屋のいずれかの部分に銭貨を置いたり挿入したりする江戸時代の習俗（栄原 1991）や、松村恵司氏が推測した、柱穴への鉄鏃の埋納や屋根裏に矢を射る建築儀礼（松村 1993）の存在を念頭に置けば、やはり上棟・屋固め儀礼の存在とそれに銭貨が用いられた可能性は決して低くない。少なくとも、覆土下層や床面出土の銭貨は、建物廃絶ないし建築時の儀礼に供されたものと考えべきだと思う。

一方、覆土上層や中層出土例は、建物廃絶後の窪地への廃棄や流入である可能性を払拭できない。しかし和同開珎が無意識のうちに埋没していく環境を理解しにくいことには変わりはない。やはり、人為的な行為を想定してよいのではないだろうか。ただ、その数が少ないことからする

と、儀礼がほかの場所で執行され、廃棄されたと考えるより、出土建物の儀礼に供されたものである可能性が幾分なりとも高いと思う。

IV-4 竈ないし竈周辺出土例

平面分布のうち、方位に基づく9区分とは別に集計した竈ないし竈周辺出土例は6例である。

武蔵国府関連遺跡63次例は竈の燃焼部中央の焼土層上面より、銭文を上にした状態で出土している。また、武蔵・多摩ニュータウンNo.61遺跡例は竈右袖部の崩落した粘土ブロック中から、常陸・弁才天遺跡例は竈脇から、破壊された竈構築粘土に覆われた状態で出土している。竈穴建物の竈については建物廃絶時の人為的な破壊を伴う祭祀行為が普遍的に行われていたという見解があり(堤1990、阿久津1994等)、竈神を送り出して二度と戻れない状態にするとか(堤1990)、竈神を封じ込めるため(平川1991)という解釈が示されている。和同開珎を出土した3例も同様に考えることが許されよう。

一方、武蔵・若葉台遺跡例では竈燃焼部の焼土層下から出土していて、竈構築時に埋置されたものと判断できる。竈は建物の構築とともに造り付けられるから、床下出土例と同じく地鎮めに用いられた可能性が生じるが、同建物は合計4基の竈が確認されていて、和同開珎はこのうち最も新しい段階の竈から出土している。竈をめぐる祭祀は竈の破壊すなわち建物廃絶に注意が向けられてきたが、竈構築時にも祭祀が行われたことを本事例は示している。

IV-5 竈穴建物と和同開珎

以上概観したように、竈穴建物出土の和同開珎には、建物廃絶、竈構築や廃棄の際に執行された儀礼に伴う事例のあることが確認できた。また、竈穴建物建築に伴う儀礼に用いられた可能性も低くないことを述べた。和同開珎は、竈穴建物を舞台とした様々な儀礼に供されたといえる。関東においては、竈穴建物を巡る儀礼こそ和同開珎の機能一呪力ーが期待される場だったといえよう。

ただ、そこでの呪具は和同開珎をはじめとする銭貨に限定されるわけではなく、玉類や腰帯具、銅鈴、鉄鏃など多種にわたる。また、こうした祭祀は東国の集落で伝統的に培われてきたもので、銭貨登場と共に出現した訳ではない。つまり、和同開珎をはじめとする銭貨は、竈穴建物での儀礼に不可欠の存在ではなく、伝統的な儀礼にオプション的に導入されたものといえよう。

V おわりに

以上、関東地方における和同開珎出土銭貨を概観した。あらためて、要約すれば、

- ① 国毎の出土数に多寡があり、受容の仕方に差異のあった可能性がある。
- ② 国府を基点とした受容・普及が考えられる。
- ③ 関東全域で竈穴建物から普遍的に出土し、そのほかの遺構からの出土はいずれも少ない。
- ④ 上野と北武蔵では、古墳の横穴式石室から出土する事例がある。この点は東北地方と共通する。

⑤ 8世紀に少なくない数が埋没している。

となる。

そして竈穴建物出土例に関しては、建物廃絶時の儀礼、竈廃絶時の儀礼、竈構築時の儀礼に供されたものが確認できたほか、建物建築に際しての上棟・屋固め儀礼に供された可能性も指摘した。竈穴建物を舞台とした様々な祭祀で多用されたことこそ、関東における最大の特色といえよう。したがって、考古学の状況から見る限り、関東の人々にとっての和同開珎は、竈穴建物をはじめとする儀礼・祭祀の場でその呪力が期待されたものであったといっていよう。

なお、今回の集成にあたって、荒井健治、石川功、上敷領久、水口由紀子、山路直充の諸氏に情報提供いただいた。末筆ながら、感謝申し上げます。

〈付記〉

小稿は、2006年1月に開催された研究集会の発表要旨に若干の補訂を加えたものである。なお、竈穴建物の竈をめぐる祭祀については、最近、総括的な論考が提出されている（荒井秀規2006「竈神と墨書土器」『古代の信仰と社会』六一書房）。竈出土の古代官銭の性格を考える上でも示唆に富むが、再考する余裕がなかった。

〔参考文献〕

- 金子裕之 1987 「都人の精神生活」『日本の古代9 都城の生態』中央公論社
- 大上周三 1989 「神奈川県出土の皇朝銭について」『湘南考古学同好会々報』37
- 堤 隆 1990 「住居廃絶時における竈解体をめぐる一竈祭祀の普遍性の一側面」『東海史学』25 東海大学史学会
- 平川 南 1991 「墨書土器とその字形」『国立歴史民俗博物館研究報告』35
- 栄原永遠男 1991 「銭貨と呪力」『人文研究』43-7（『日本古代銭貨流通史の研究』塙書房 1993所収）
- 中沢 悟 1991 「関東地方出土の皇朝十二銭について」『専修考古学 久保哲三先生追悼号』専修大学考古学会
- 坂口滋皓 1992 「遺跡出土の皇朝銭」『大谷向原遺跡』海老名市遺跡調査会
- 八木光則 1992 「和同開珎と蝦夷」『岩手史学研究』75 岩手史学会
- 松村恵司 1993 「鉄鏃と建築儀礼」『山梨考古』46 山梨県考古学協会
- 阿久津久 1994 「カマドにみる祭祀の一形態—墨書土器の置かれた風景—」『日立史苑』7 日立市史編さん委員会
- 府中市郷土の森博物館編 1999 『和同開珎』
- 深澤靖幸 2000 「東国の竈穴建物と銭貨」『府中市郷土の森紀要』13
- 奈良文化財研究所編 2002 『鈔帯をめぐる諸問題』

深澤靖幸 2003 「古代竪穴建物跡から出土する銭貨」『“おかね” はじめて物語』

上高津貝塚ふるさと歴史の広場

依田亮一 2004 「武蔵・相模の紀年銘資料と共伴する土器様相—古代銭貨（皇朝銭・北宋銭）

を中心として—」『Archaeo-clio』5 東京学芸大学考古学研究室

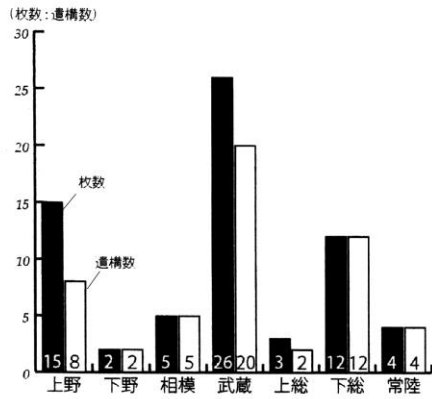


図1 国別と同開珎出土枚数・遺構数
*中世遺跡・遺構出土品を除く

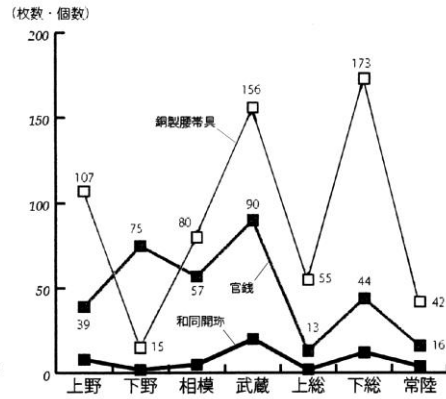


図2 国別と同開珎・古代官銭・銅製腰帯具の出土数
*中世遺跡・遺構出土品等を除く
*下野の官銭75枚のうち72枚は男体山山頂遺跡出土
*上総の官銭13枚のうち1枚は安房出土

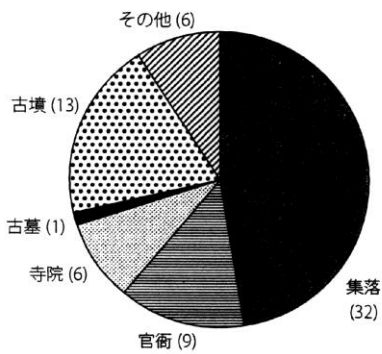


図3 遺跡の性格別と同開珎出土枚数
*中世遺跡・遺構出土品等を除く

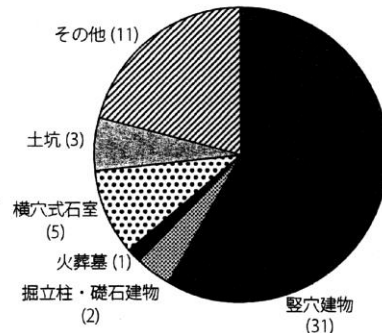


図4 遺構別と同開珎出土遺構
*中世遺跡・遺構出土品等を除く

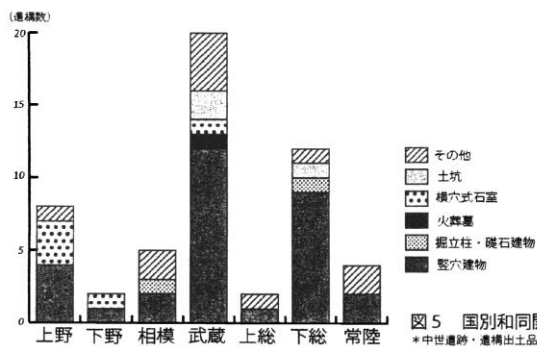


図5 国別と同開珎出土遺構
*中世遺跡・遺構出土品等を除く

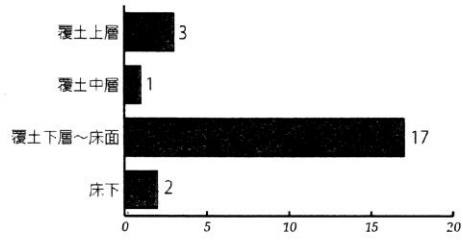


図6 竪穴建物出土と同開跡垂直分布

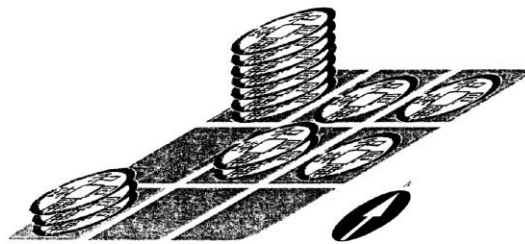


図7 竪穴建物出土と同開跡平面分布

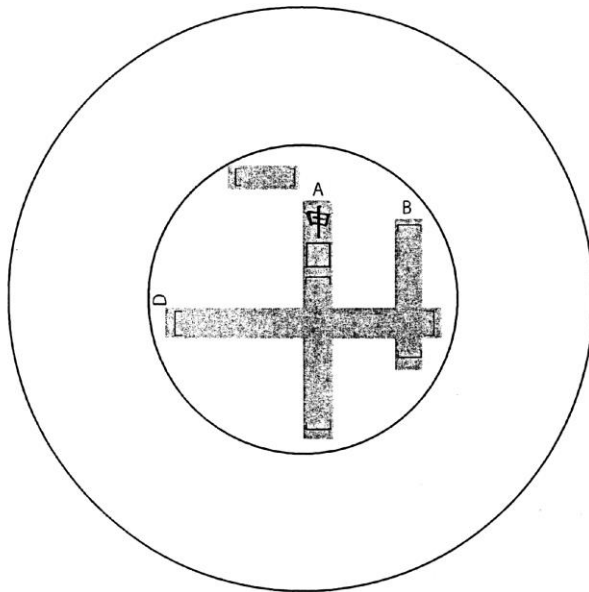
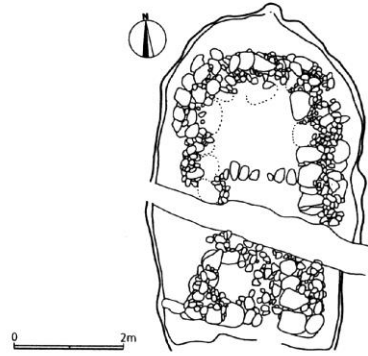


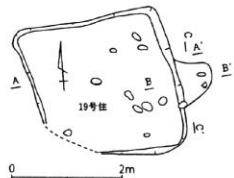
図8 武蔵・多摩閼坂遺跡出土土椀 底部外面の墨書

上野 引間 2号墳

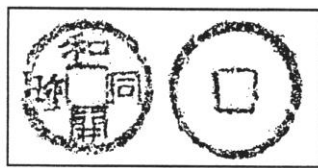


2号墳横穴式石室

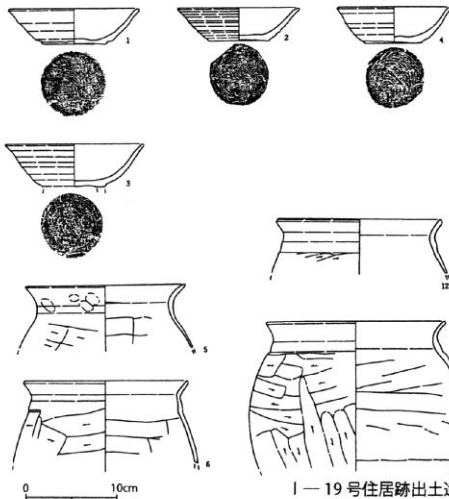
上野 豊後原遺跡



1-19号住居跡

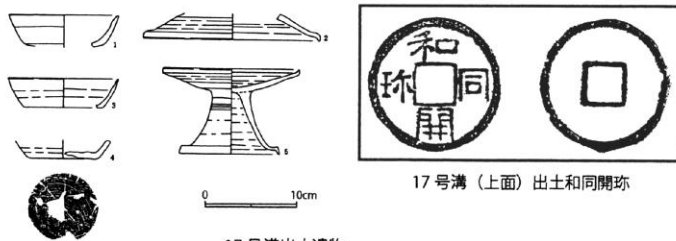


1-19号住居跡(北西部上層)出土
和同開珎



1-19号住居跡出土遺物

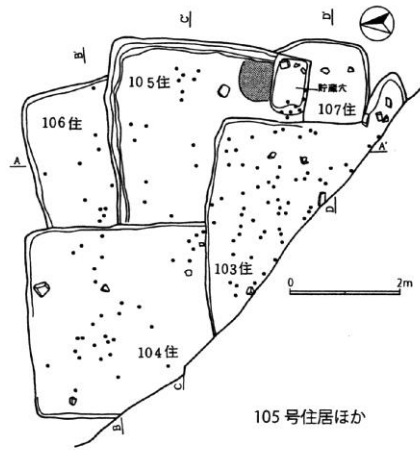
上野 下芝五反田遺跡



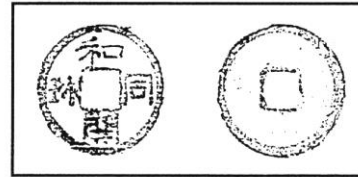
17号溝(上面)出土和同開珎

17号溝出土遺物

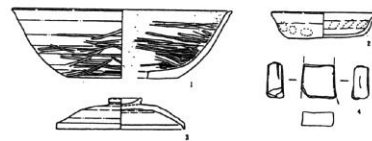
上野 熊野堂遺跡



105号住居ほか

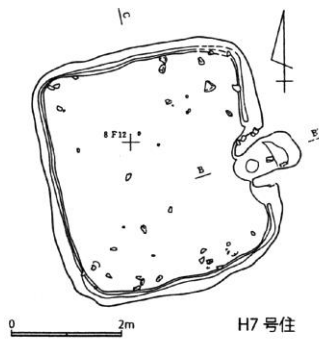


105号住居（北壁中央周溝際）出土
和同開珎

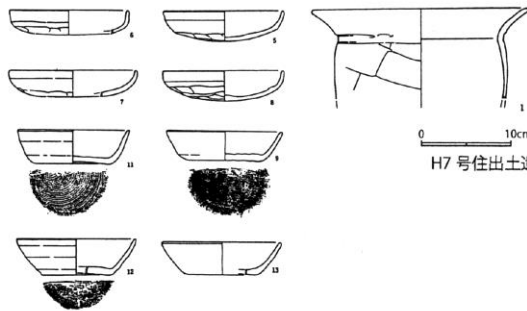


105号住居（北壁中央周溝際）
出土遺物

上野 芝山遺跡

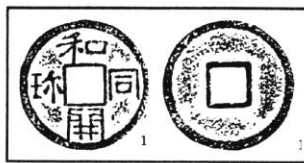


H7号住

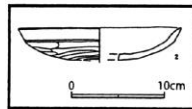


H7号住出土遺物

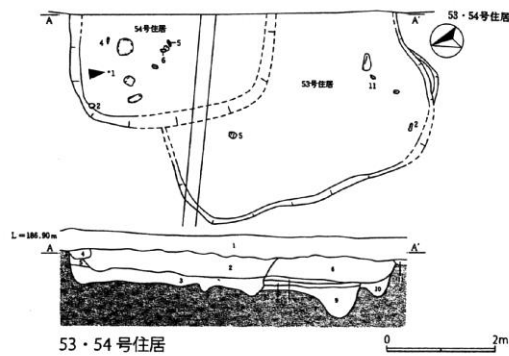
上野 白井二位屋遺跡



53号住居（床面）出土
和同開珎

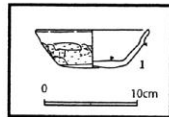


53号住居出土土師器

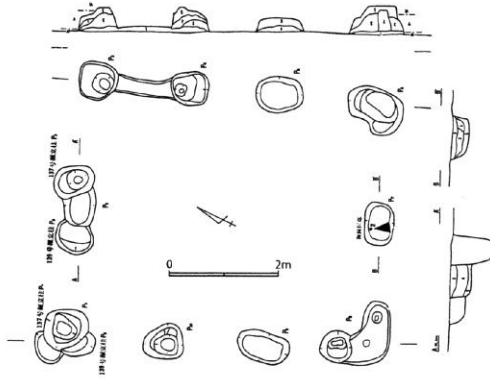


53・54号住居

相模 向原遺跡



138号掘立柱建物跡
出土土師器

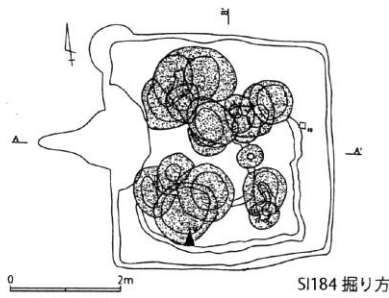


138号掘立柱建物跡

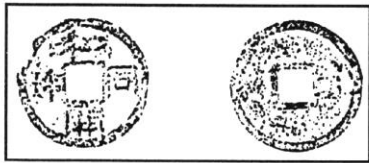


138号掘立柱建物跡
出土和同開珎

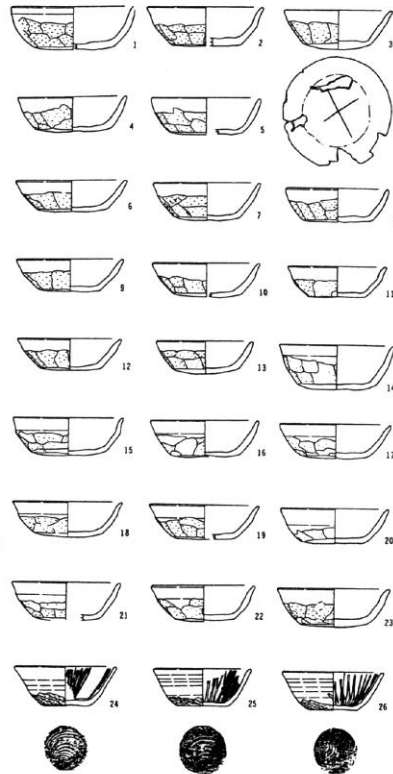
相模 草山遺跡



SI184 掘り方



SI184 出土和同開珎



SI184 出土遺物

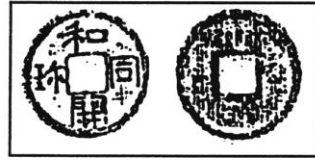


相模 真田・北金目遺跡群



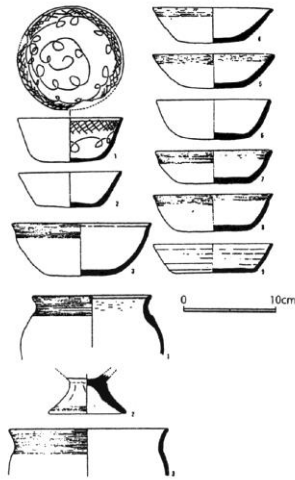
4区水場遺構 SC006 出土
和同開珎

相模 池子遺跡群

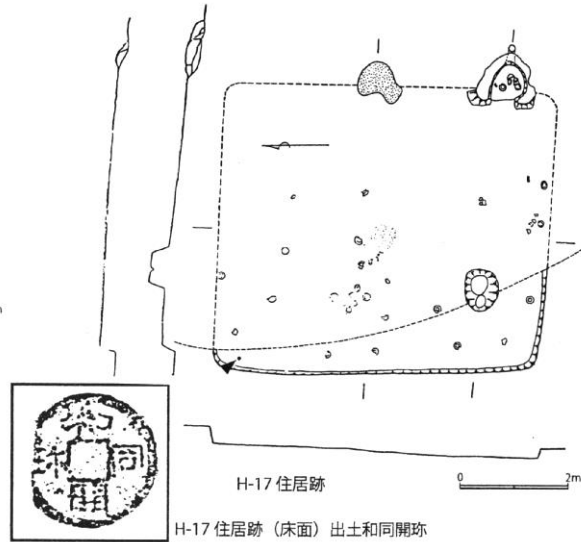


No. 1-A 東地点北半部
埋没谷出土和同開珎

武蔵 森戸原遺跡



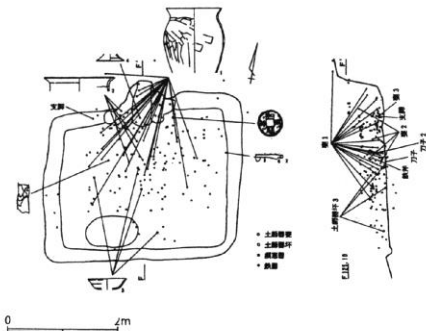
H-17 住居跡出土遺物



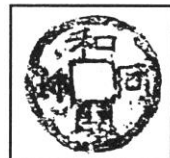
H-17 住居跡

H-17 住居跡 (床面) 出土和同開珎

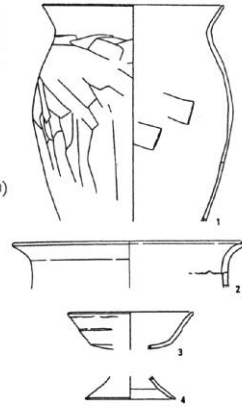
武蔵 多摩ニュータウンNo.71 遺跡



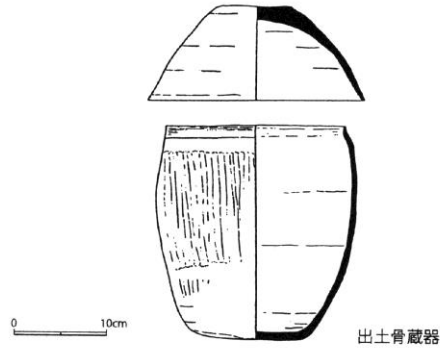
3号住居跡遺物出土状況



3号住居跡 (竈崩落土中)
出土和同開珎

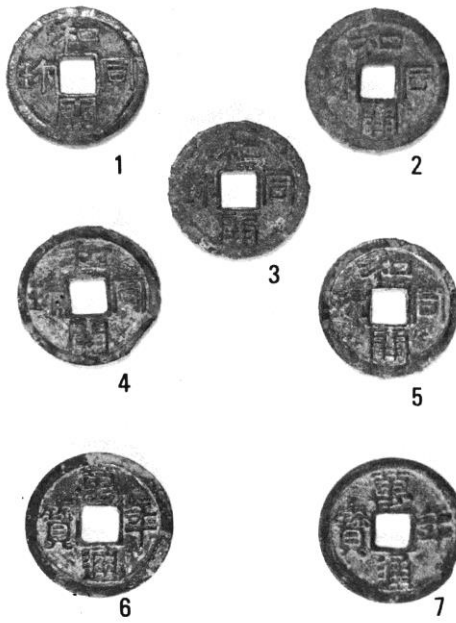


3号住居跡出土遺物

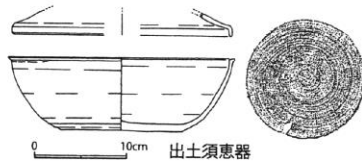


出土と同開珮

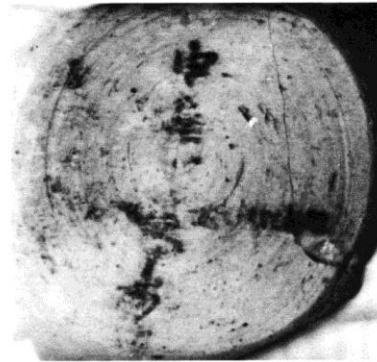
出土骨蔵器



出土と同開珮・万年通宝



出土須恵器



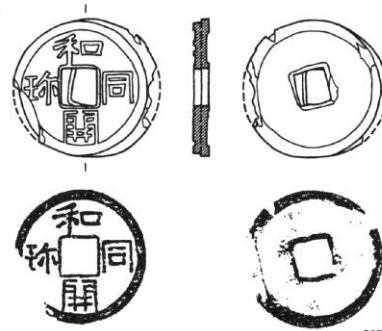
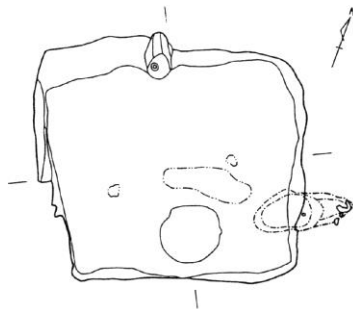
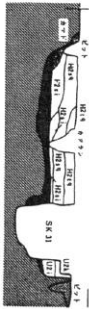
須恵器碗底部外面墨書 赤外線TVを撮影 反転



須恵器碗底部内面鑄痕

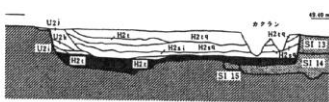


34次調査区攪乱出土と同開珎

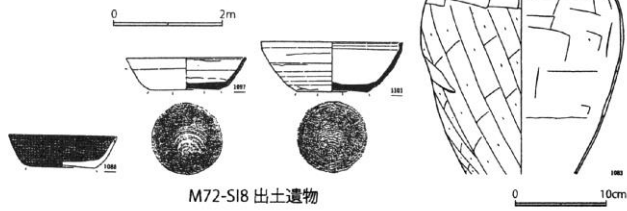


M72-S18 (覆土) 出土と同開珎

305

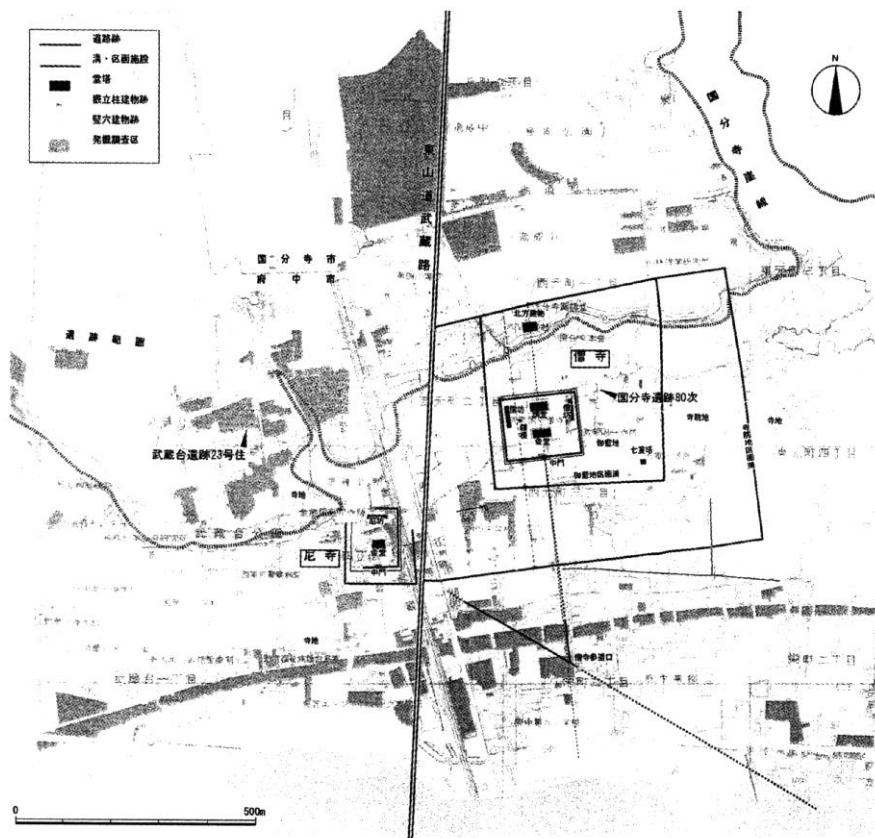


471次調査区 M72-S18

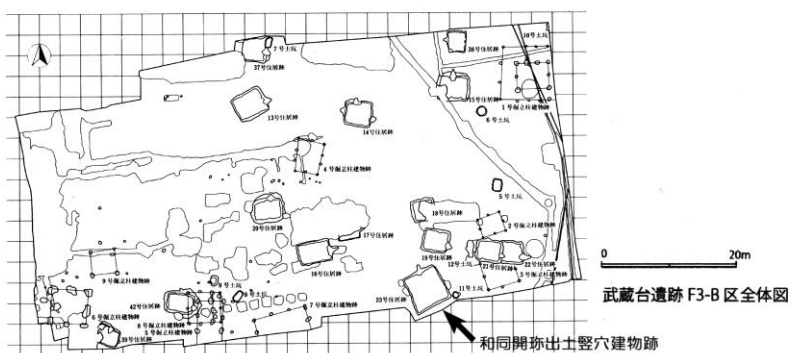


M72-S18 出土遺物

武蔵 武蔵台遺跡（武蔵国分寺跡西方地区）-1

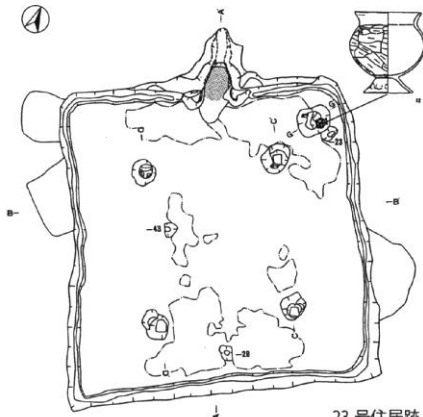


武蔵台遺跡と国分寺跡

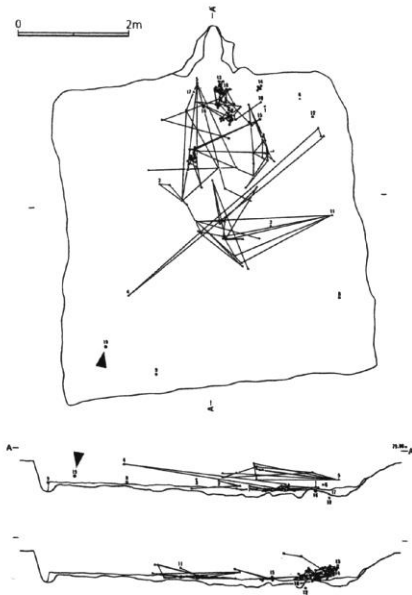


武蔵台遺跡 F3-B 区全体図

和同開珎出土竪穴建物跡



23号住居跡

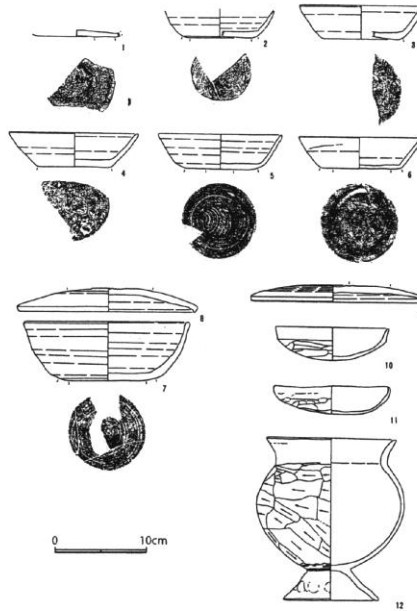


23号住居跡遺物出土状況

構造部
 ● 坪・堀
 ▲ 土層跡
 ● 瓦・埴
 ● 灰
 ● 鉄製品

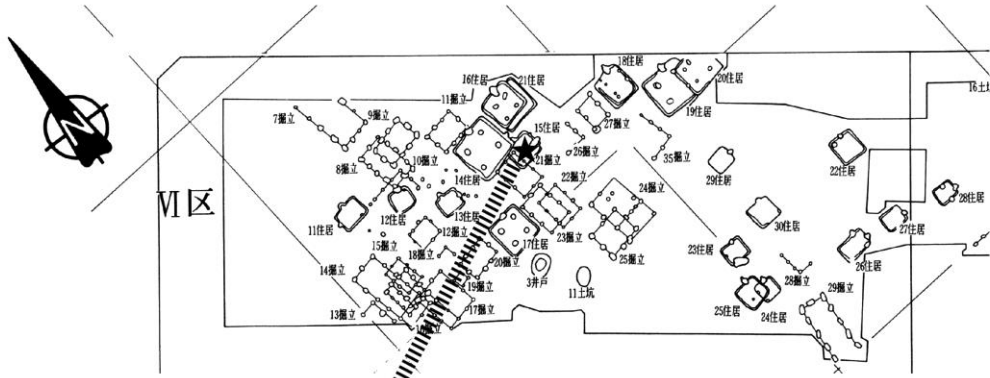


貯蔵穴出土漆紙文書 (天平勝宝九歳曆)



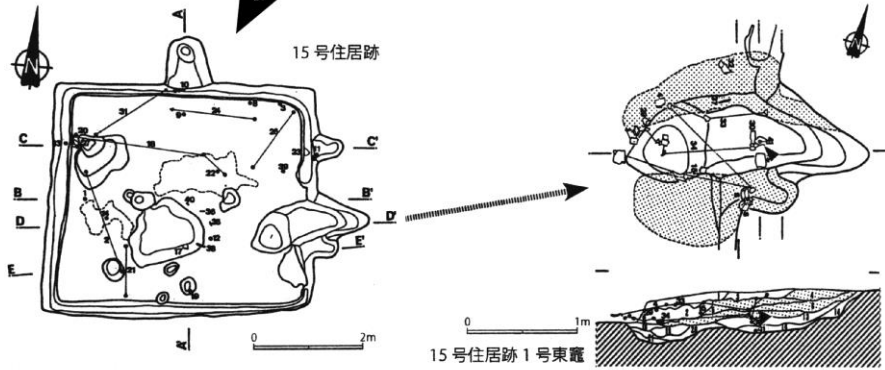
23号住居跡出土遺物

武蔵 若葉台遺跡



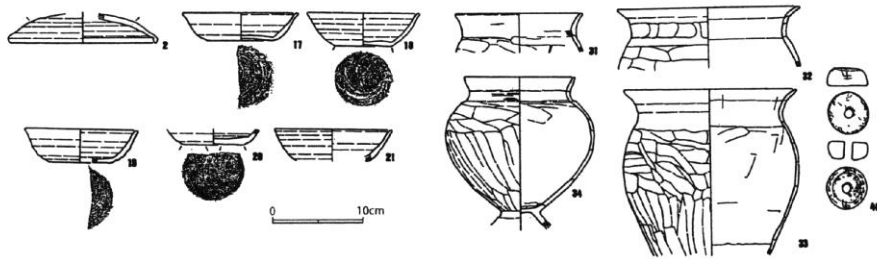
VI区

若葉台遺跡調査図部分



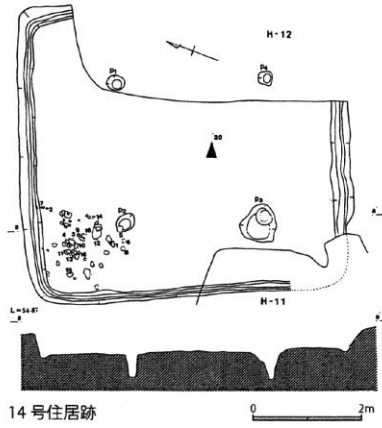
15号住居跡

15号住居跡1号束竈

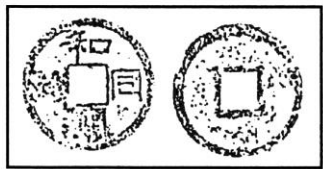


15号住居跡出土遺物 (覆土最下層・床面・床下・竈)

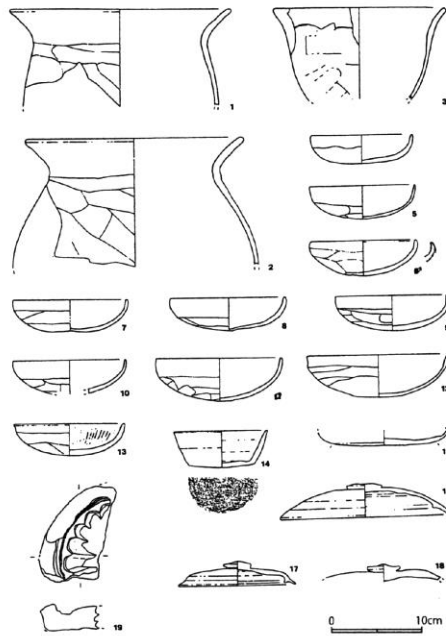
武蔵 内出遺跡



14号住居跡

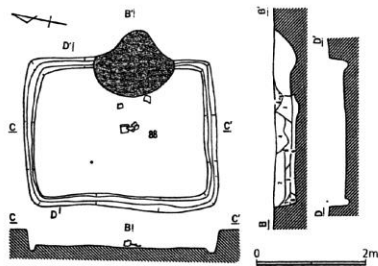


14号住居跡出土と同開跡

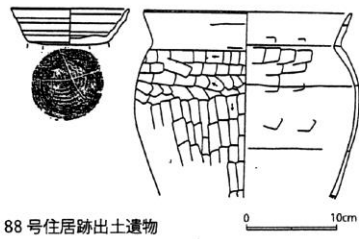


14号住居跡出土遺物

武蔵 揚櫃木遺跡

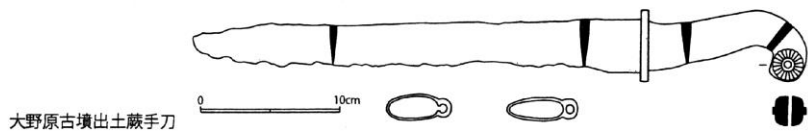


88号住居跡



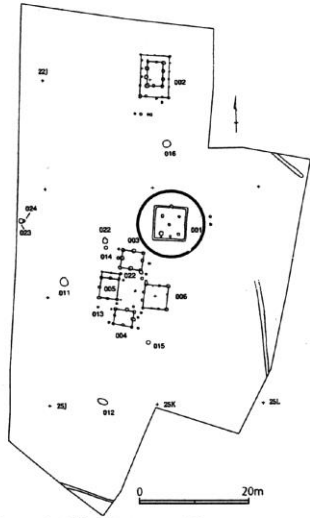
88号住居跡出土遺物

武蔵 大野原古墳



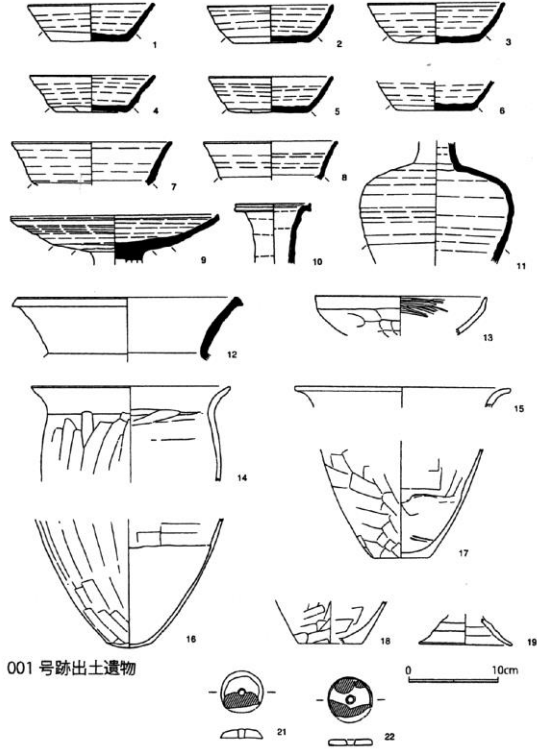
大野原古墳出土鐲手刀

001号跡（覆土中層）
出土と同開珎



針ヶ谷遺跡第2地区A区全体図

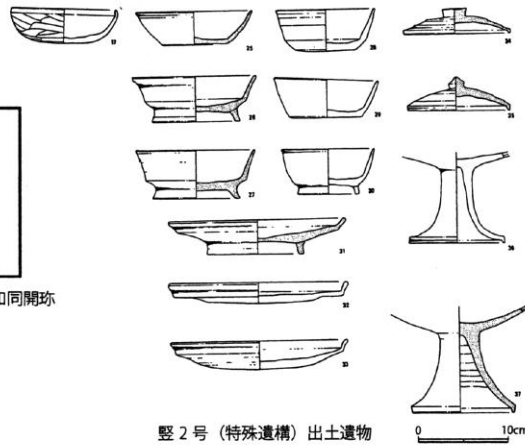
上総 針ヶ谷遺跡



001号跡出土遺物

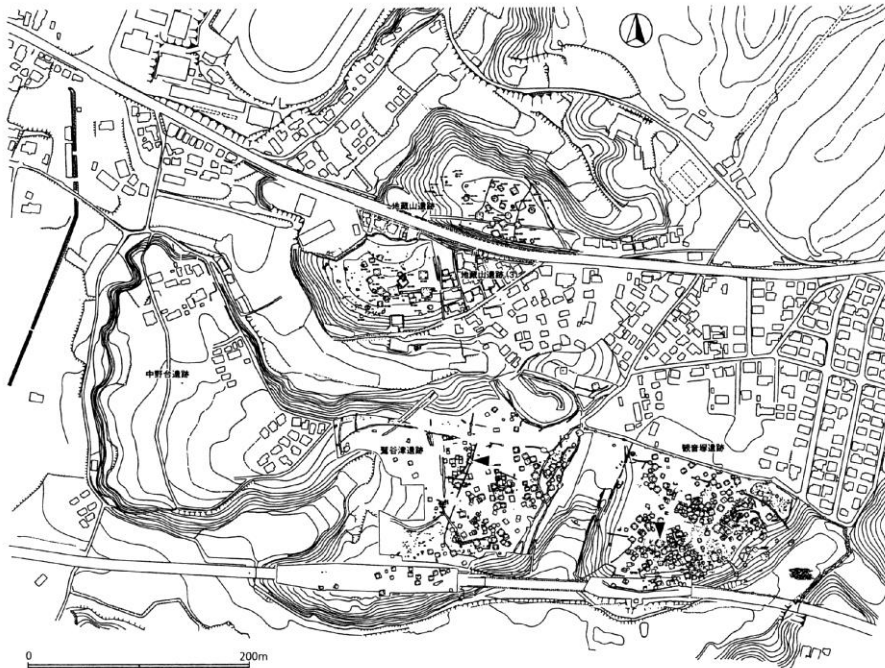
下総 国府台遺跡

豎2号（特殊遺構）出土と同開珎

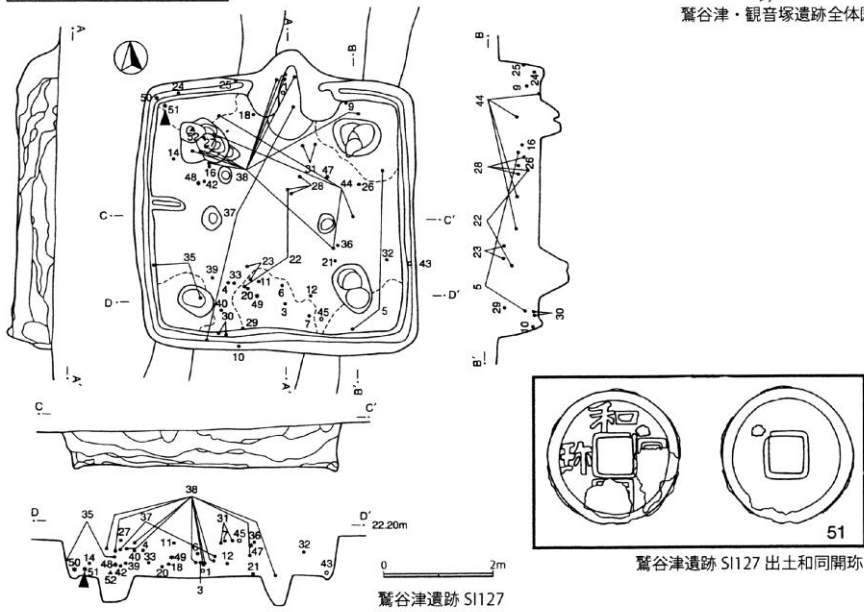


豎2号（特殊遺構）出土遺物

下総 鷺谷津遺跡・観音塚遺跡



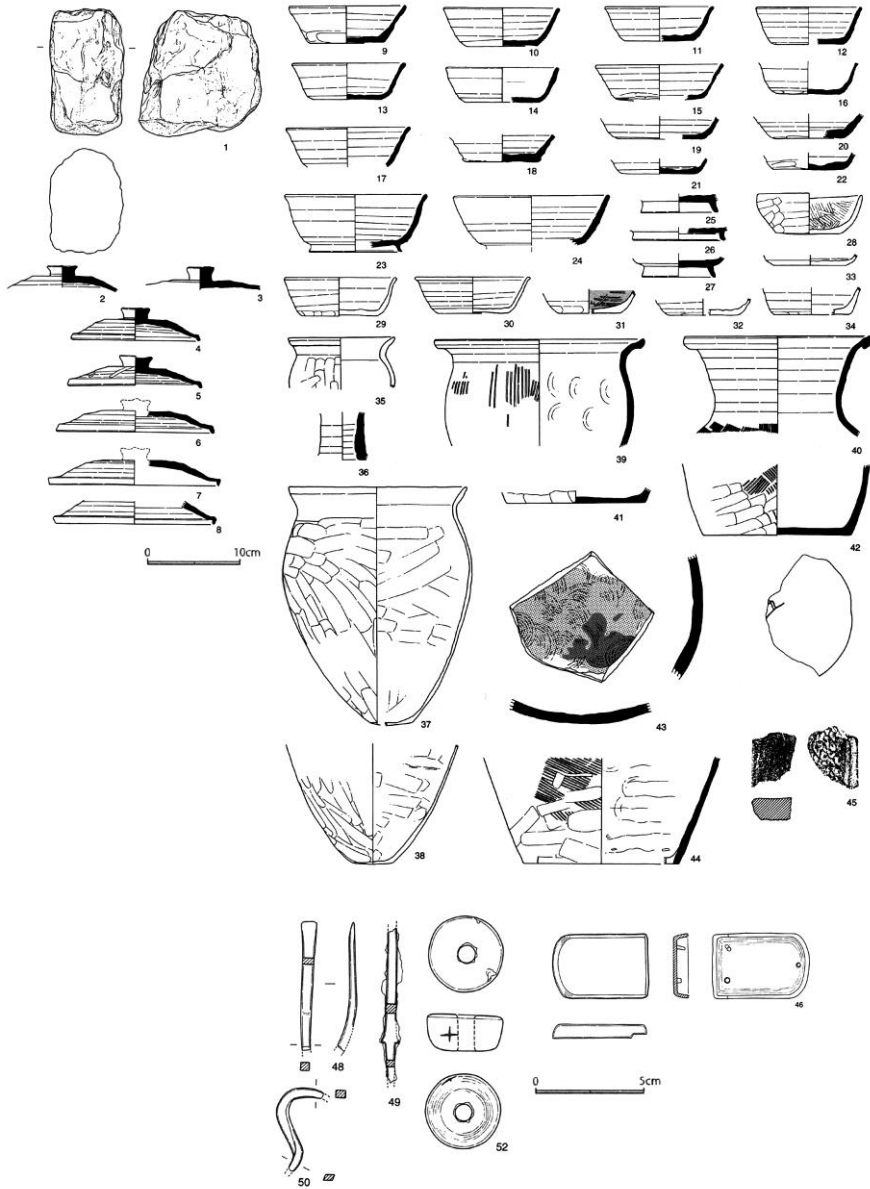
鷺谷津・観音塚遺跡全体図



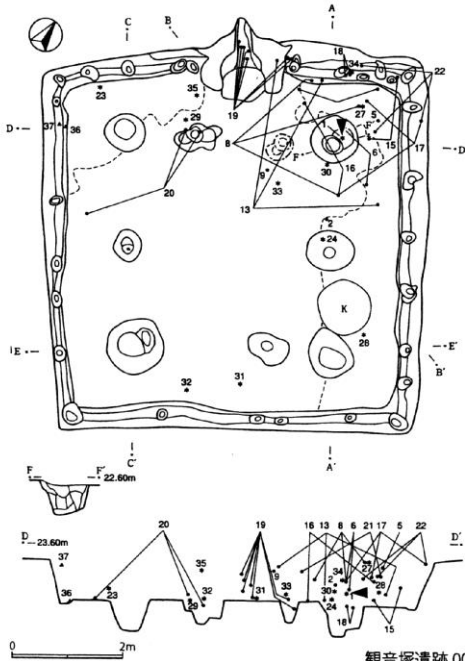
鷺谷津遺跡 SI127 出土と同開珎

鷺谷津遺跡 SI127

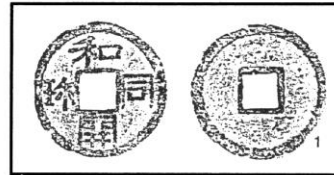
下総 鷺谷津遺跡・観音塚遺跡 - 2



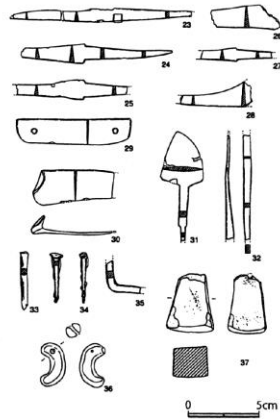
鷺谷津遺跡 SI127 出土遺物



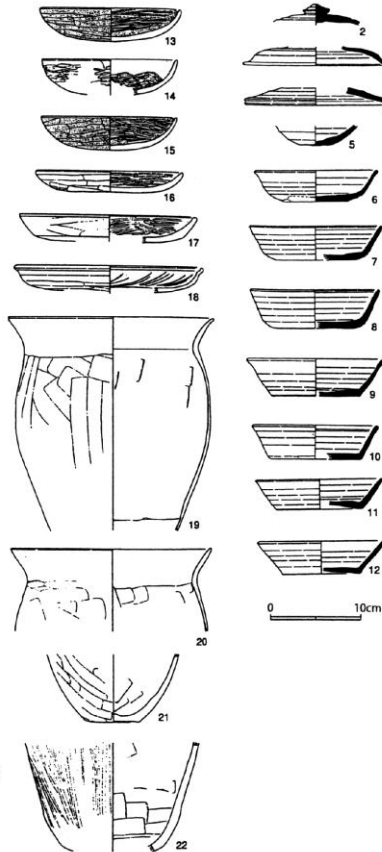
観音塚遺跡 006



観音塚遺跡 006 出土と同開珎

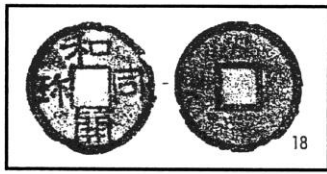


観音塚遺跡 006 出土遺物

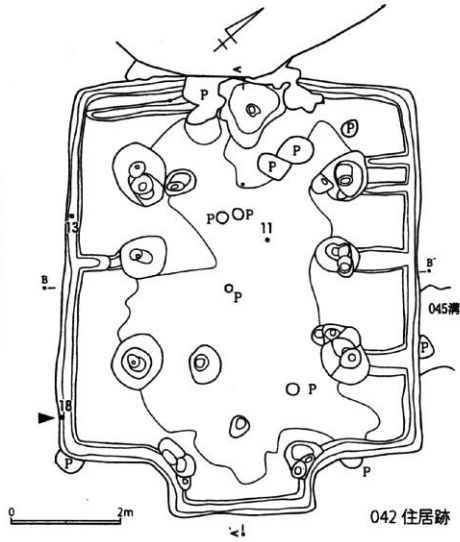




印内台遺跡位置図

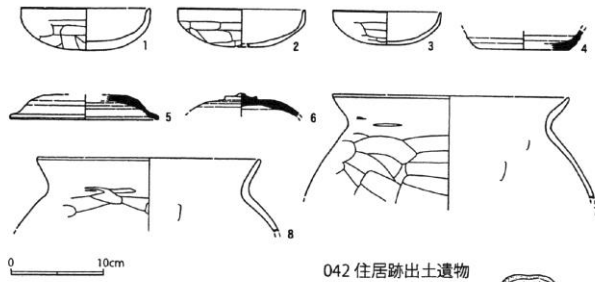


042 住居跡出土と同開珎

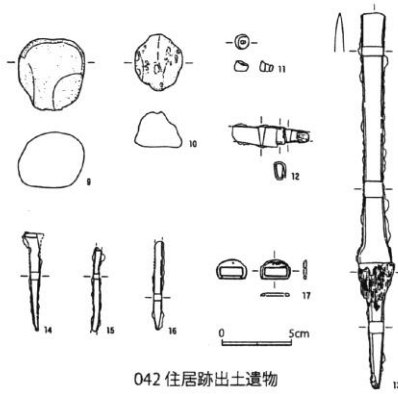


042 住居跡

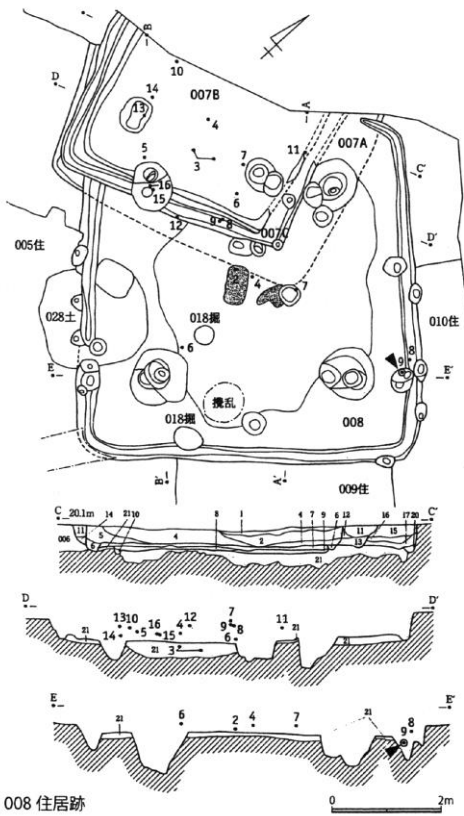
下総 印内台遺跡 32 地点 -2



042 住居跡出土遺物

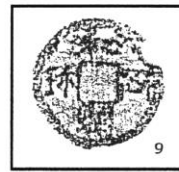


042 住居跡出土遺物

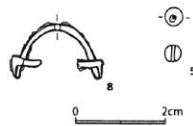
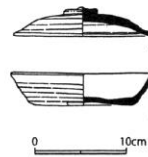


008 住居跡

下総 夏見台遺跡 28 地点

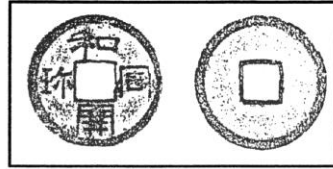


008 住居跡出土と同開跡



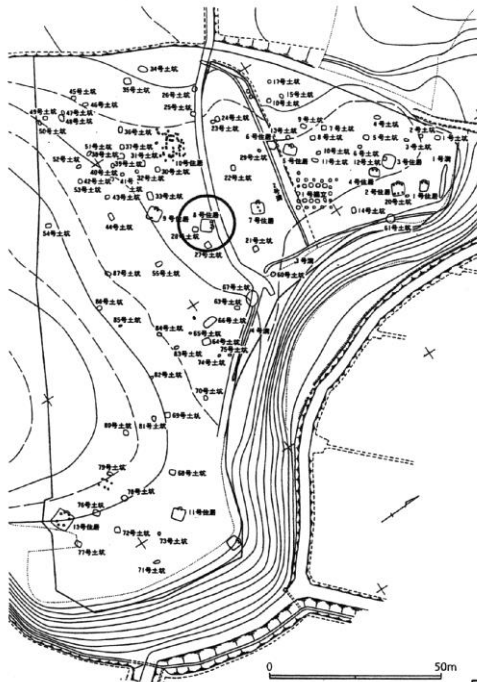
008 住居跡出土遺物

下総 夏見大塚遺跡 13 地点

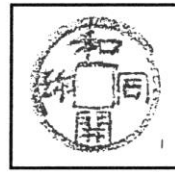


攪乱出土と同開珎

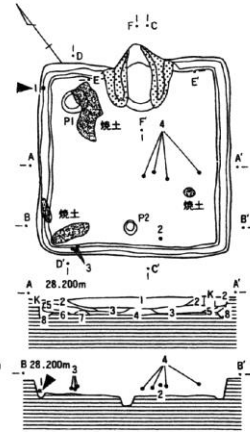
下総 塚越遺跡



塚越遺跡全体図



8号竪穴住居跡出土と同開珎

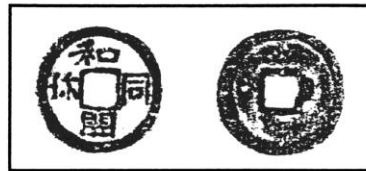


8号竪穴住居跡



8号竪穴住居跡出土遺物

下総 稻生大神

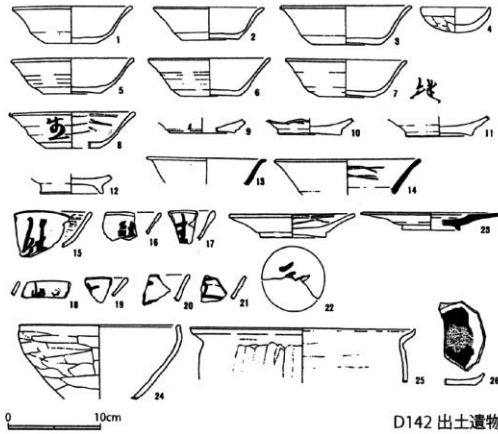


和同開珎銀錢

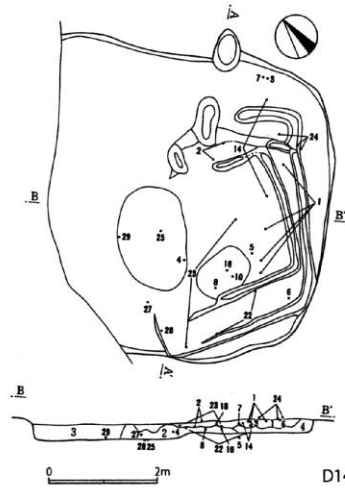
下総 白幡前遺跡



D142 出土と同開珎ほか

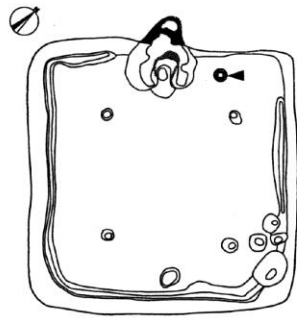


D142 出土遺物

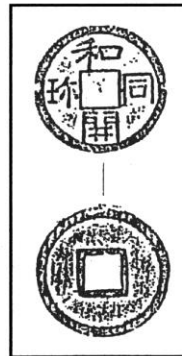


D142

常陸 弁才天遺跡

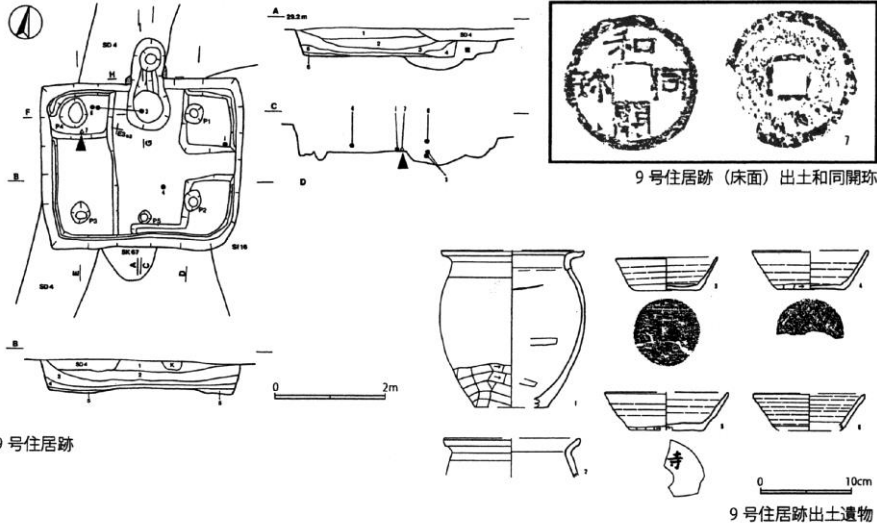


6号住居跡



6号住居跡(竈脇)出土
和同開珎

常陸 明石遺跡



9号住居跡

9号住居跡出土遺物